

【資 料】

高木兼寛の脚気の研究と侍精神

松 田 誠

東京慈恵会医科大学名誉教授

高木先生の書いたものや講演記録を読んでいると「先生も侍だなー」と思うことがしばしばある。本小論では先生が脚気の研究で示されたそのような言葉をとりあげ、その侍精神（武士道）との関係について考察してみたい。

そのうちの一つは、脚気の原因に関する先生の考え（栄養説）を明治天皇にご説明申し上げた「この病気の原因を研究いたし、これを予防することができますれば、日本の学者の名誉でございます。それが外国の学者によって発見されるようでは日本の学者の不名誉（恥）でございます」であり、もう一つは、栄養説の実証（栄養試験）の成功後に語った「もしあの試験に失敗していたら、それまで多くのひとに虚言（うそ）を言っていたことになり、直ちに切腹する心算であった」である。

この小論ではこの二つの言葉について考察してみたい。

I. 日本の医学者の名誉のために

高木兼寛（1849-1920）は5年の英国留学を終えて、明治13年（1880）の暮れに帰国した。そして間もなく海軍病院長に就任した。彼は留学前から、海軍の兵士に脚気患者がきわめて多く、しかもその原因が分からないため、予防法、治療法がまったく確立されないことに大変苦勞していた。英国に留学したのも、その理由の一つは脚気の原因を明らかにしてその予防、治療に貢献したいということがあった。

当時、脚気の原因として世界的に重視されていたのは、細菌によって感染するという伝染病説であった。多くの疾患が固有の細菌の感染によるとしたパスツールやコッホらの細菌学の発展の影響であった。しかしこの伝染病説では実際の脚気の予防や治療にはまったく役にたたなかった。

高木は、まず疫学的方法、つまりこの病気の原因となりうる要因（気温、衣類、部署、食物、生計など）と脚気の罹患率との関係を詳しく調べた。そしてこの病気の原因が兵士の摂る食物の組成に関係があることに気がついた。遠洋航海で外国の港に停泊中は（洋食を摂るためか）脚気患者が減り、航行をはじめると（米食にもどるためか）ふたたび患者が増えるのである。

そのことをもっとも顕著に示したのは遠洋航海

に出た練習艦「龍驤艦」であった（明治15年（1882）12月品川出航、翌16年（1883）9月帰港）。ニュージーランド、ペルー、ハワイなどを巡る約9万キロの航海で乗員376名中169名もの重症脚気患者を出し、しかもうち25名もの死者を出したのであった。そしてこの場合もハワイで食糧を全部洋食に替えてからは一人の患者も出さなかったのである。

高木は、従来の兵食（米食）では炭水化物に比して蛋白質が少なすぎる欠点があり、洋食ないし麦食のように蛋白質を多くして炭水化物を少なくすれば、脚気は予防、治療できるのではないかと考えた。

彼はこのような兵食改善の必要をさらに確実にするためには、龍驤艦に続いて明治17年（1884）2月に遠洋航海に出る予定の筑波艦をつかって、栄養試験を試みることもっとも効果的であると考えた。筑波艦の乗組員全員に、蛋白質を多くした改善食（おもに洋食）を摂らせ、しかも龍驤艦と同じ航路をたどらせて、脚気患者がまったく出ないことを実証するのである。

しかし筑波艦の栄養試験の実施にたどり着くまでには大変な苦勞があった。伊藤博文をはじめ多くの高官を動かし、明治天皇にまで脚気問題解決の急務を奏上しなければならなかったのである。

天皇への実際の奏上では、高木はこのように申

し上げている（明治16年(1883)11月29日）。

「今やわが国の兵士や学生はその多くが脚気病に罹り死亡いたします。彼らはわが国の後継者でありますから、どういたしましてもこの病気を予防、駆除することを計らねばなりません。この病気の原因を研究いたし、これを予防することができますれば、日本の医学に携わる者の名誉でございます。我が国にかくも多数発生する病気の原因が外国の学者によって発見されるようでは、日本の学者の不名誉でございます。是が非でもこれをはやく究めねばなりません。」

脚気の原因は、高木の研究に依りますれば栄養の調査が悪いためであります。従来の米食では炭水化物が多く、蛋白質が少なすぎるためであります。

これを早急に改善せねばなりません。陛下のご英断をもちまして、何卒これをお改め遊ばれますように願わしゅうございます」と。

こうして遂に筑波艦での栄養試験は実行に移されることになった。そして明治17年（1884）2月3日、筑波艦は品川港を出航したのである。あとは朗報を待つばかりであった。

ところが不思議なことに、報告を毎日待ち続けるうちに高木の心はしだいに不安な気持ちに変わっていった。なかなか試験成功の報告が来ないのである。もし失敗したら多くの兵士を殺すことになり、さらに陛下にまで虚言（いつわり、うそ）を申し上げたことになる。

このような不安な高木によりやく試験成功の電報が届いたのは、8ヵ月後の10月9日であった。電文は「ビョウシャーニンモナシ アンシンアレ」（病者一人もなし安心あれ）であった。脚気患者は一人も出なかったのである¹⁾。

こうしてついに彼の“脚気の原因は栄養摂取の欠陥にある”という脚気の栄養説は完全に実証され、そのプライオリティーはもちろん彼のものになったのである。脚気を予防するビタミンB1が米糠（米の蛋白部分）から発見されたのはその30年後であった。高木はここで、武士道における「一番槍、一番乗りの名誉」をかち得たのである。

1. 高木家の武士道教育

高木は幼少から、父 兼次（俗称 喜助、1829-

1874）から厳しい武士道教育を受けた。当時、高木家は兼次の大工職によって生計を立てるといってごく下級の武士であったが、その始祖は内大臣大将 藤原道隆（953-995）であった。もとは非常に高貴な家柄であったのである。そのことは父から何度も何度も聞かされたに違いない。

内大臣大将 藤原道隆といえば藤原兼家（平安中期の公家、摂政、関白。929-990）の長男であり、「この世をばわが世とぞ思う…」と謳った藤原道長（966-1027）はその弟である（高木兼次、兼寛の兼はこの藤原兼家あたりから来ているのかも知れない）。道隆より四代後の文貞から高木姓を名乗り、さらに高木宗恒（1609-1662）の代から鹿児島藩士（薩摩藩士）になったらしい。

もともと高木家の宗教は神道であった。高木は17歳で医学を志し、故郷 宮崎を後にして鹿児島にむかうが、そのとき「高木家祖神の霊」と書いた木札を自分で作り、それを懐中に入れて出発している。彼はその頃まで父の大工仕事を手伝っていたというから、そのような物を作るのはお手のものであったのだろう。そしてこの木札は守護神として英国に留学するときにも持参しており、ついには72歳の生涯を終えるまで一度も離れたことがなかったといわれる。よほど大切にみついていたのであろう（また「祖神」については、ごく晩年（大正6年（1917））にも「祖神の垂示に基づける日本民族衛生」という自著を出版している）。

木札の「高木家祖神の霊」とは始祖 藤原道隆を始めとする先祖の霊のことであろうが、そもそもその「祖神の霊」については、民俗学者 柳田國男はこのように説明している。人は死ぬと御霊になるが、死んで間もないときは、「荒みたま」といわれて、まだ強い穢れをもっているが、子孫の供養や祈りを受けて浄化されて御霊となる。それは初めは個別的であるが、一定の時間が経つとある共通の御霊に融けこむ。つまりそれが祖神の霊（氏神）である。祖神の霊は故郷の村里をのぞむ山の高みに昇って、子孫の家の繁栄を見守る。しかも生と死の二つの世界の往来は自由であり、

盆や正月などにはその家に招かれて共食し、交流する存在になるという²⁾。

「祖神の霊」に近い言葉に「地霊人傑」というのがある。これは高木が晩年、故郷に帰ったときに、色紙に書いた言葉である。倉迫一朝によると、それは祖先の霊たちが守り育ててきた風景や、その地の文化とでも呼べる「地霊」が、優れた人材、人格を産み出していくという意味だという³⁾。それは、己の實在にかかわる言葉であり、地の霊がそこにいてくれるから、つまり地霊に守られた故郷があるから、今の己の存在がある、という感謝の念を込めてのものであるらしい。後年、高木が宮崎神宮大造営の幹事長をかって出たりしたのも、「祖神の霊」や「地霊」にたいする感謝の気持ち、故郷 宮崎にたいする感謝の気持ちからだったのではないだろうか。

本来、武士の名誉というものは、人間を人間たらしめている最重要部分であり、それを差し引けば、人間に残るのはおもに獣性のみであると考えられていた。だから武士が今生の願いが完全に断たれたときには、ただひたすら純粋に武士らしい武士であったという己の「名誉」をのみ惜しんだのであった。多くの若者がわが家の敷居をまたいで人生の旅に出るとき、己の名誉を成すまでは二度とこれをまたがないと己に誓ったのもそれであった。

ところが、高木の場合には、名誉は自分だけのものではなく、自分を支えてくれた後ろ盾（祖神の霊や地霊など）のものでもあったのである。上述の天皇への奏上で、「日本の学者の名誉でございます」とのべたのも、その例だったのではないか。脚氣の原因を明らかに出来れば、それは自分の名誉であるばかりでなく、それまで自分の後ろ盾になってくれた祖神の霊、地霊などをふくめた祖国日本の名誉でもあったのであろう。

2. 己の恥は薩摩藩の恥

慶応4年（1868）戊辰戦役がはじまったとき、まだ若かった高木も学業半ばにして薩摩藩の軍医として戦役に加わった。ただ、この戦役で高木は医師としてきびしい屈辱を味わった。それは、同行の薩摩藩の軍医はほとんどが漢方医であったため、治療法が拙劣であり、あまり貢献できなかったのである（他藩の軍医は豊かな西洋医学の知識

と技術をもって治療に当たっていた）。

東北のある野戦病院で、高木の拙劣な外科手技を見ていた大村藩（長崎）の軍医のごときは「薩摩には医者はおらぬらしい」といって哈哈大笑したほどであった。高木は恥ずかしさのあまり、赤面し、返す言葉もなく立ちすくんでいたという。

高木はこのときの屈辱がよほどこたえたらしく、「薩摩藩の存在はあらゆる方面において抜群であったが、ただ学術の方面においては残念ながら如何ともする術がなかった。自分はいよいよ決意を新たに、この方面でも藩の実力を示すように努力せねばならない」と誰彼かまわず何度も語ったといわれる。後年親しくなった石黒忠恵（陸軍軍医総監）なども、この話を何度も聞かされて閉口したという話が残っている。高木の場合、高木個人の受けた不名誉（屈辱）は、やはり薩摩藩ぜんたいの屈辱でもあったのである。

幸い、薩摩藩でもこの戊辰の役の経験に懲りて、明治2年（1869）に藩立の鹿児島医学校を設立して西洋医学の教育を始めた。高木はただちにこの医学校に入学した。幸い、戊辰の役で大活躍した英医ウィリスが医学校の校長として迎えられたため、高木の未来は大きく展開することになった。ウィリスは高木の才能をきわめて高く評価し、彼の英国留学をさかんに薦めることになったのである。

高木が明治天皇に「脚氣病を予防することができれば、日本の学者の名誉であり、それが外国の学者によってなされるようでは、日本の学者の不名誉（恥）であります」と奏上していたころ、ヨーロッパではフランスのパスツール（1822-1895）は「科学に国境はないが、科学者には祖国がある」と叫んでいた。パスツールも高木とおなじように祖国にたいする強い敬愛の情をもっていたのである。

ただ子細に両者の国情を比較すると、そこにはかなりの違いが見うけられる。パスツールが活躍していたころのフランスは、新興ドイツを代表するプロイセンと戦ってもろくも敗れており（普仏戦争、1871）、しかもそれは科学・技術の敗北でもあったといわれている。さらに細菌学者パスツールの権威は若いドイツの細菌学者コッホに追撃さ

れつつあったのである。だからこのパスツールの言葉には、まだ日本にはなかった排他的な国家主義（ナショナリズム）の意味合いが強くでているのである。

ところが高木のいう「日本の学者の名誉、不名誉（恥）」には、まだ明治維新は始まったばかりであり、外国と大きい戦争はしたことがなく、したがって国家主義的なおいはまだなかったのではないか。そこにはただ「祖神の霊」や「地霊」や「薩摩藩」などと一続きになった祖国「日本」があっただけだったのではないかと想像される（この種の祖国「日本」については、国家主義（ナショナリズム）とは区別してむしろ郷土愛（パトリオティズム）に近いとみる人も多い）。

II. 武士に虚言あるべからず

先に述べたように高木の脚気栄養説の正しさは筑波艦からの栄養試験成功の電報によってはっきり証明された（明治17年（1884）10月9日）。そしてその後は、食物の改善によって脚気の発生は確実に激減していった。とくに海軍での脚気の絶滅はあざやかであった。彼の功績は国際的にも高く評価され、栄養学の著書には必ずそのことが明記され、それを契機にビタミン学という新しい学問分野が展開されたことが記述された。現在、名誉ある日本人栄養学者として南極大陸の地名になっていることもよく知られている。明治天皇に奏上申上げた通り、この栄養説の提唱は、高木の名誉はもちろんのこと、日本の学者の名誉にもなったのである。

しかし先にも述べたように、筑波艦から情報が届くはずの（明治17年（1884））9月ごろの高木のは、まるで病人のように動揺していた。試験成功の朗報がなかなか来なかったのである。そのころ日本では、東大の権威ある内科教師、独医ベルツが「脚気はおそらく一種の伝染病であり、ある種の細菌に由ることはほぼ間違いないであろう」と述べて、医学界に大きい影響を与えていた。さらに同じ17年の暮れには東大衛生学の緒方正規がドイツ留学から帰国して、東大脚気病室の患者から脚気菌をとり出すだろうといわれていた。緒方はドイツの細菌学者レフレル（コッホの高弟）

について細菌学を学んできたのである。これも高木には気になることであった。

高木は英国に留学したとはいえ、他のドイツ留学生とは違って、医学全般を学ぶための留学であり、特定の医学研究のための留学ではなかった。帰国して初めて研究（疫学調査）を始めたわけである。しかもわずか3年ばかりで、脚気の原因である新しい学説（栄養説）を発見したというのである。若し間違いだったら、如何しようか。多くの兵士を殺し、海軍中枢ばかりでなく天皇にまで虚言（うそ）を申し上げたことになる。これは切腹してお詫びするしか方法がない。

考えてみると、高木が朗報を待ちに待っていたその9月は、前回の龍驤艦のときには最も多くの脚気患者を出した期間（ペルー―ハワイ間）に当たっていた。そこでは138人もの脚気患者を出し、そのうち22人もの死亡者を出していたのである。普段は帆を張って航行するのに、帆を張る乗員が次々と脚気で倒れたため、火力で航行せねばならず、その火夫も脚気で倒れてしまったので、火をたくことができない。やむなく艦長以下士官が代わるがわる釜をたいて、辛うじてホノルル港に着くことができたのであった。高木は毎日のように、これと同じ光景を筑波艦の中に妄想していた。

彼は筑波艦からの情報を待ちきれず、同じ9月の17日から犬をつかった脚気の発症予防実験をはじめている（もし筑波の試験が失敗しても、この犬の実験で栄養説の何らかの有意な情報は得られると思ったのであろう）。ところが現実の時間経過をみると、筑波艦からの「病者一人もなし安心あれ」の朗報を知ったのは翌10月9日であったから、もう少し待てばそんなに気をもまずに、良い気持ちで、長い時間と労力を要する犬の実験にとり掛かれた筈である。神様もひどい悪戯をしたものである。

高木は後年、若い軍医から「若しあの時、筑波艦内に脚気患者が多数発生し、栄養試験が失敗していたら、如何なさる心算だったのですか」と問われたとき、彼は言下に「その時は切腹してお詫びする覚悟であった」と答えているが、その言葉にまったく嘘はなかった。本当に切腹して詫びる以外に方法はないと思っていたのである。

もともと武士道における切腹とは、武士がみず

からの罪を償い、過去の不始末を謝罪し、不名誉を免れ、みずからの誠実さを（邪心がなかったことを）証明する重要な方法であった。ただ武士道という虚言（いつわり、うそ）というのは、もともと本人が意識し、気にしている虚言であって、高木の場合のように、すべて本気で言っていたことは罪ではなかったのであるが、高木にとってもうそんなことはどうでもよかった。

先にも述べたように、父 兼次による武士道教育はきわめて厳しいものであった。しかも意識的に虚言（うそ）を言うことは最も見苦しい悪事であって、それには大きい代償を（場合によっては己の命までも）払わねばならないと教えられた。ここにはその厳しい教を高木自身に語っていたくことにする。実践女学校の卒業式での彼の講演である（「母の涙によって救われたる我が幼時の生立」日本婦人. 1910; 12(4): 29-33. より）。

正直でなければ武士にはなれぬ

私の家はきわめて貧しく、間口四間に奥行き二間というみすばらしい家に住んでいました。それでも父母のお陰で私は勉強するために塾に通っていました（小学校はまだなかった——筆者）。貧しいとはいっても武士の流れをくむものですから、父は一人前の武士に仕立てようと考えていました。しかし父も学問がありませんでしたので、父からうけた唯一の教訓は「正直にせよ」「男らしくせよ」「正直でなければ武士にはなれぬ」ということだけでした。

私の一生を通じて忘れられない一事件は、春の彼岸の頃でした。私は毎日塾に通っておりました。ところが塾に行く途中、友達のところに寄りますと、彼岸の団子をつくったから食べて行けとのこと。子供のことですから団子を食べて遊んでいると、もう塾に行く時間が過ぎてしまいました。塾の先生は昔気質の厳格一点張りの人で、子供心が大変畏れておりました。今から行けば叱られるに決まっている。それが恐さにととうその日は行かないで家に帰ってしまいました。父が先生のことをいろいろ尋ねますが、いい加減なことを言って何とかごまかしました。その切なさは今もって忘れません。

翌朝は先生のところに出かけたのですが、昨日欠席したのと、父にいい加減なことを言ったのが気になっ

て、どうも行く気がしなくなりました。そこが子供心で、今日もやすんでしまえと考えまして、また友達のところへ行って遊んでおりました。

そのところに父がヌッとあらわれました。私は思わずやりとしました。父はいきなり私を引き立てて家に帰り、座敷に連れ込み、自分の前に正座させました。私は父の顔をまともにみることができません。

「お前は昨日先生のところに行ったか」言葉はきわめて厳格でした。私はこれに返事ができません。「昨日、お前は立派に先生のところに行ったと言った。しかし今日、先生に逢って聞くと、お前は昨日も、今日も行かなかったそうだ。行かないのもいいだろう。しかし行かないものを、何故行ったと偽ったか。父はかねがね何と教えたか。正直でなければ立派な武士には成れぬと毎日言い聞かせたではないか。お前のようなものは、腐り果てた人間になって、先祖の名も、家の名誉も辱めるものだ。お前のようなものは生かしておくことはできない。成敗してくれる」というより早く、父はそばにあった蒔き割りで私の臀部をつづき打つのであります。

何といっても罪は私にあるのですから、私は痛さに堪えて黙っておりました。父はますます激しく打ちます。そこへ母が驚いて走ってきまして、とにかくその場は助かりました。そしてそれから二週間ばかりは、母は毎日、紫色になった傷あとを見ては「何故お前は偽りを言ったか、これはお前の罪の跡だ。そんな浅ましい心では立派な人間にはなれぬ。人が見ていないからと思うて悪事をして、神様はちゃんと見ておいでになる。終始、表も裏もないように勉めねばならぬ」といって泣いてくれたのであります。

私は、父の恐さは一度で身に染みましたが、同時に母の温かい涙に如何ばかり感化されたことでしょう。以来、私は決して嘘はつくまい、と心にかたく誓ったのであります。

以上は高木が幼時に父から受けた武士教育の一例であるが、この小論で述べてきた「名誉」「不名誉（恥）」「虚言（うそ）」のすべてに触れている。それにしても「虚言」にたいする制裁のきびしさは驚くほどである。

この「虚言」については、高木の初孫の樋口一成（元慈恵医科大学長）の言葉も残っている。「私も幼時のころ、祖父から機会あるごとに『正直で

あれ』『嘘をついてはいけない』『人を騙してはいけない』と、まるでお経を読むように、繰り返しくりかえし論されました」と。高木の晩年の話である。

高木にはまた慈恵医学校の学生に与えた多くの教訓があるが、その一つ「誠実（まめ）であれ」も同じ意味であろう。この「誠実（まめ）であれ」には、筆者はむしろ「愚直であれ」に近いものを感じる。

高木は晩年、穆園（ぼくえん）と号して書を楽しんだが、雅号の“穆”は故郷の地名・日向国東諸県郡穆佐村からの由来であり、“園”は亡き母の名前であった。

ただ地名は現在の宮崎県東諸県郡高岡町に変わっている。

著者の利益相反 (conflict of interest : COI) 開示 :

本論文の研究内容に関連して特に申告なし

文 献

- 1) 海軍中央衛生会議. 海軍脚気病予防事歴. 明治23年.
- 2) 柳田國男. 先祖の話. 東京: 筑摩書房; 1946.
- 3) 倉迫一朝. 病気を診ずして病人を診よ: 麦飯男爵高木兼寛の生涯. 宮崎: 鉦脈社; 1999.